

哲学と言語

西木 原 靖

1. 現代哲学の一つの特徴は、言語への関心にあるといわれる。それはなにも、いわゆる *Linguistic Philosophy* にかぎらぬのであって、たとえば、ハイデッガーは『言語』(*Unterwegs zur Sprache*, 1959)で書く。『言語』に言及するまでもなく、『存在と時間』において、すでにすぐれて言語的である。これはなにもハイデッガーにかぎらず、哲学そのものの伝統的性格である。『存在と時間』におけるハイデッガーがすぐれて言語的であつたとすれば、むしろハイデッガーは哲学の性格とそこで極限にまでおしすすめたといえるかも知れない。

2. それ故に、哲学の可能性と本性が「問題」であるのが現代の哲学的状況であるとすれば、それが言語の問題として自覚されるのは当然でもあり、自然でもある。考えるということは、何はともあれ、言語で考えるということである。それ以外の可能性があるとされても、その意味が解らぬほどに、それは我々の常識になっている。(レオナルドは絵画で考えたといわれる。下村寅太郎『レオナルド・ダ・ヴィンチ』)

3. しかし、すでに我々は自然言語を信頼していない。我々は自然言語の他にそれから区別されて、論理学を持つ。自然言語のグラマーから区別された論理学の自覚は、実は言語で考えるというものの、考えるということと話すということの何等かの意味での背離を予想している。我々は非論理的に話すことが出来る。しかし、非論理的に考えることは出来ない。

ヴァイゲンシュタイン (*Wittgenstein, Vorwort*, P.27) は『トラクタトゥス』について次の様に云う。

「この書物は、(それ故) 思惟に、いやむしろ、思惟にではなくて、思想の表現に境界をひくだろう。なぜなら、思惟に境界をひくためには、我々はこの境界の両側を考えることが出来ねばならぬ。それ故に、我々は考えられることが出来ないものを考えることができればならない。この境界はそれ故に、言語の中にだけひくことが出来る。そして、その境界の外側にあるものは、単にナンセンスであるだろう。(*Vorwort*, P.27)

4. 記号言語は、非論理的に話すことが出来ない様に構成された言語である。

T.3.325, *Um diesen Irrtumern zu entgehen, müssen wir eine Zeichensprache verwenden, welche sie ausschließt, indem sie nicht das gleiche Zeichen in verschiedenen Symbolen, und Zeichen, welche auf verschiedene Art bezeichnen, nicht äusserlich, auf gleiche Art verwendet, Eine Zeichensprache also, die der logischen Grammatik — der logischen Syntax — gehorcht.*

5. 伝統的に哲学者は、言語使用の理想主義的統制を要求していたともいえるわけである。つまり、實在がそこにうつしだされる様に言語使用を統制することが哲学者の理想だったわけである。それが同時に論理的であることであつた。それは次の様にしてなされた。

言葉の眞の意味を見出すことによって、非論理的な文章構成を排除すること。他方、言葉の眞の意味は、定義として、再び言葉で記述された。それではしかし、論理が實在に小れる点がなくなる。文章が論理的であるとき、實在をうつし出すことが出来るためには、論理的文章はどこかで實在と関係することが出来るのでなければならぬ。ヴァイトゲンシュタインの再現の理論は、その要求を満足させる少なくとも、一つの立場を提供している。彼によれば、物と、物の名前の対応は、文章が實在に小れるところの触角である。(T.2.15/5)

6. すると、言葉の意味は、すで本質的に定義によって限定されるべきものではなくなる。それはすでに知られているものでなければならぬ。それがすでに知られていることによって、文章は意味 (Sinn) をあらわすことが出来る。「II」の記号はその時、哲学的文法にとって、すでに本質的ではなくなる。(T.5.533)

6.2322 「二つの表現の意味の同一性は主張されない。なぜならその意味について何かを主張することが出来るためには私はそれらの意味を知らねばならない。そして、もし私がそれらの意味を知っているなら、私はそれらが同じことを意味しているかどうかを知っている。」

7. 従つて、ヴァイトゲンシュタインにとって、対象は外部からだけ記述されることになる。

1.2.173 「像はその対象を外部から再現する。(その立場がその再現の形式である。)それ故に、像は対象を正しく、あるいはまちがって記述する。」

8. 再現の形式はロジカル・シンタクスにおいて示される。(変数は形式概念をあらわす)それは言語が実在と共有するところのもの、両者の限界を示す。

T. 5.6 「私の言語の限界が、私の世界の限界を意味する。」

そこで、ヴァイトゲンシュタインは、世界の限界の自覚の方法を、科学の文章の論理的分析に求めたといえる。(T.M., 4.11, 4.12) 『論理学に関するノート』によれば、「哲学は論理学と形而上学に分れる。論理学が形而上学の基礎である。」

9. 言語の中から、実在を探し求める哲学者の要求は、実は、言語の限界の自覚に、実在をうつしだすこととして、あるいは理解されるのかも知れない。吾々は非論理的に考えることは出来ない。しかし、非論理的な文章を構成することは出来る。それが実在の喪失感を吾々にあたえているということは、ありうることである。

10. ヴァイトゲンシュタインは、ロジカル・シンタクスについて語ることは出来ないと考える。それは、科学の言語の論理的分析において見出されるものである。ヴァイトゲンシュタインの記号言語は、人工言語ではない。すべての自然言語に内在するロジカル・シンタクスである。それに対して、カルナツプは人工言語の構成を試みる。そして、そのロジカル・シンタクスについて語る。哲学は、科学の言語のシンタクスである。(The Logical

Language, Part V.)

10. ヴァイトゲンシュタインにとって、言語批判は、哲学の方法であって、目的ではなかったと思う。それを、哲学の目的にしたのは、論理実証主義的解釈である。カルナツプによれば、ヴァイトゲンシュタインは未だ形而上学的である。「トラクタトゥス」に出てくるメタフィジカルな表現は、シンタクティカルな文章に翻訳されねばならない。カルナツプは「トラクタトゥス」の、例えば、「世界は事実の全体であって、物のではない。」を、「科学は文章の体系であって、名前のではない。」でおきかえてみせる。(Caruap, ibid. p. 303) しかし、すると再び言語の限界がいまになる。すべての文章が、対象言語か、あるいは、シンタクティカルな文章に、たとえ一見そうでない様にもみえても翻訳出来るというのだろうか。それとも、対象言語でもなく、シンタクティカルな文章に翻訳も出来ない文章があるというのであるのか。少なくとも、カルナツプは翻訳の原則を欠いている。

11. 古典的な美例であるが、カルナツプは、"Babylon was created of in yesterday's lecture"

を "The word 'Babylon' occurred in yesterday's lecture" で置きかえる。しかし後者は必ずしもシNTAXテイカルな文章ではない。一つの歴史的な出来事を記述している。さらに、前者と後者は論理的に等価ですらない。講義の中で、バビロンという言葉が出て来たからと言って、それが主観的にとりあつかわれたとはかぎらない。又、講義の中でバビロンという言葉は出て来なくても、バビロンが主観的にとりあつかわれることは出来る。

12. カルナツプは、そこで意味論的に等価の概念を洗練する(それによって、記述的等価、例えば "Evening Star = Meaning Star" と論理的等価 "Human being = Rational animal" を区別することが出来た。)(*Meaning and Necessity*)しかし、カルナツプの言語は人工言語である。そのシNTAXとセマンティカル・ルールは、コンベンショナルにあたえられる。カルナツプにとつて、各人、自分の論理を形成するのは自由である。(*Logical Syntax*, P.52) それは知識の問題ではなくて、決断の問題となる。(*Can logic, meaning postulate, P.225 in meaning and necessity*)しかし、これによって、言語の一般的限界の問題、は無制限にあいまいになり、ましてや、そこに実在さうつしだすという意義は完全に失われてしまうことになる。

13. コンベンションナリズムに批判的に、経験主義的言語理論の理念が最近注目さあびだした。それは、理想的な話者や聞き手を想定し、その間にコミュニケーションをなしたしめる一般的能力、条件を経験主義的に発見しようとするものである。それによって、ナンセンスな文章をナンセンスとし、分析的な文章を分析的として見わけ、つまり、言語の限界を説明する原則とすることを志さず。(*See, Jonald. T. Katz, The Philosophy of Language, 1968*)しかし、言語の限界を、言語能力の限界の問題におきかえることによって、世界を正しく見るといふ、哲学的意義は、ここでもやはり見失しなわれている。(言語学としては、もちろんそれは欠点ではないにしても。)

14. 30年代、『トラクタトス』をベースにして、論理実証主義的議論が花咲いているころ、皮肉なことに、ウィトゲンシュタインは、『トラクタトス』に批判的にいわゆる後期の思想に入りつつあった。問題の核心は、自然言語の限界のあいまいさを、理想言語の形成によって規制し、それによって、世界を正しく見るといふ『トラク

タトス』の哲学の理念そのものが、哲学的当惑のむしろ源泉になっているという点にある。なるほど自然言語は、その限界においてあいまいであるが、あいまいであることが、むしろ言語の自然である。言語に意味をあたえるのは、その限界ではなくて、使用である。使用されない文章は *Language in Philosophy* である。必要なことは使用の場を見出すことである。『トラクタス』の哲学の理念は、哲学の理念としてはむしろ正統的なものである。それ故に、後期のワイトゲンシュタインの哲学批判の哲学は、哲学の理念に、根本的「向題」を提供しているといえるだろう。我々が、言語を媒介にして哲学的であることが、むしろ、実在から我々を遠ざけるのではないかという向題である。